
100回死んだバカと天才人造人間

天倉 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

100回死んだバカと天才人造人間

【Nコード】

N6445X

【作者名】

天倉 梓

【あらすじ】

これは“命”と“生命”の話

プロローグ

学校という場所は“閉鎖的”だ
子供たちの勉強の様子を見せようとはしない
稀に外部の人間が来るが
その時、誰もが真実を隠してしまう

研究所という場所は“秘密主義”だ
情報を漏らさないように、細心の注意を払い実験の内容は隠さねば
ならない

しかしそれは、ただの“功績”のためか
それとも・・・“教えられない”実験だからか

人間という生き物は“有限”だ
心身を持つが故に、体が傷つき、心が傷つき、精神を侵される、そ
して彼らの命もまた“有限”

人造人間とは“不完全”だ
人によって生み出された“生命”
人間のモルモットである
しかし、心も無く動く彼らは

“謎”であり、もつとも“危険”である

第巻話（前書き）

ちよつと日常から逸脱したいので

ちよつと変な世界観の作品を書いてみました

（o`´、´）www

な・の・で

気にせず読んで頂けると、ありがたいです

後、気になる点があれば御指導お願いしますww

第巻話

〔2076年4月上旬〕

ここは“東京”日本の首都にして
世界科学の発展の地である

人口はおよそ1600万人

そのうち学者400万人・政治家1万人・軍人5万人・学生700
万人である

残りの500万人は一般人・人造人間
そして“素体”である。

この世界では人間・人造人間・素体の
3つの命が交差している

東京・・・いや、世界が変わったのは
今から50年前・・・

2026年 4月1日

地球に対して巨大な隕石と思われる物体の落下が確認された

落下ポイントは東京・小笠原諸島と割り出された

これにより衝撃などのことを考え、周囲500km圏内の侵入を禁止
小笠原諸島の島民には東京へと移住を行ってもらった。

全世界もこれに伴い、東京・小笠原諸島の周囲500km圏内に避
難勧告及び立ち入りを禁止。

2026年 4月20日

隕石の落下ポイントである小笠原諸島軍を用いて警戒にあたった、
軍へはあわよくば破壊を試みると発表。

2026年 7月5日

落下の発表から約3ヶ月
事態は動き出した・・・

成層圏へと入ってきた隕石に対して空軍・海軍共に破壊を試みるが
全くもって無傷のまま落下

隕石は小笠原諸島・父島へと直撃

しかし、落下時の衝撃によるクレーターは学者たちの計算とは異な
り、かなり小規模のクレーターであり、周辺海域にも問題は見られ
なかった

学者たちからは不満と恐怖と興味の声があがっていた。

2026年 7月12日

UN（国際連合）は日本に対して「自衛隊を使用し、現地を調査し報告せよ」と通達をした。

2026年 7月14日

自衛隊員348名、政府閣僚20名、国連直属の派遣員15名と共に落下ポイント、小笠原諸島・父島へと降りた

以後、UNによる発表

「落下物は巨大な鉱石と思われる物体であり、直径は約5メートル
高さ2メートル、謎の発光をし続けていた、この事から完全に地球上の物では無いことが判明」

しかし、公式での発表はこれだけであり
以後は一切の情報は無し、小笠原諸島・父島への上陸自体これ以後から完全にUNの管理下になった。

だが、この10年後

2036年

世界に新たなる科学が生まれたのだ…
UNによる発表“人造人間”の誕生
これが世界の変化の象徴である。

人間とは変わらぬ外見、人とは違う何かを持つ存在
これが“人造人間”それが“人造人間”

人造人間の存在は人間の利益の為に造られ続けた、処分も楽で地球に対して無害であり、主に利点しかn

ボスッ！

「いった！」と叫び俺は驚き手を止めてしまった
ふと横を見ると、教師の緑山みどりやまが教科書を持ち立っていた、相変わらず品のない黒のスーツを着こなし、掛からないように綺麗に切られたショートヘア、まあこれでも女性って言うのが驚きだな、声は割と可愛いのかなあ…と、そんなことより…

「桜井いゝ貴様は私の授業をなんだと思っているんだあ？」

み、妙に恐ろしい笑顔をこちらに向けて微笑んでいる…とりあえず答えておくか

「えっ…と、論文作成の時間？（なああああ！なんで作業のことをおお！！ん？ああでも事実か…って！よくない良くない！うるさいんだよなあ…授業以外の事をしてると…）」

緑山の完全な作り笑いだ…終わった、死亡フラグだ…

「貴様は明日から来るなあ！！」
やっぱり、うん分かってたよ

俺は緑山に教室から蹴り出され、廊下でふと考え事を始めてみた

ここは“東京”世界で一位の経済国“日本”の首都である、東京は

基本中心区域に公共施設を集中、それ以外はほとんどが移住区となっている、元々の名所や歴史建造物は国の保護下で大切にされている。

「まさに籠の鳥みたいに、外を眺め続けてるだけなんだよな…」

安全に暮らす、それは彼らのお陰なのかもしれない、俺は学校の中庭を見つめた、そこには“人”と変わらぬ彼等の1人が箒で掃き仕事をしていた。

“人造人間”俺たちはそう呼んでいる。

「なんか、せつねえ…」

何故こんな言葉を言えたのか、自分はある存在に恩返しを出来ないからなのか、疑問も浮かぶ…自分の気持ちそのものに…

簡単に言えば、彼等に“心”がないからか

「こっからどうしますかね…」

一応は学校の校門まで来たが、まったくもってなにも考えてなかった。

「なああ！！思いつかんや…ん？」なぜ暇で振り向いた中庭を見つめる、そこには先程の人造人間はまだ居た、よく見つめると案外可愛かった…

「ああ…なんか残念…」

何故だ！何故残念なんだ！告白しようとも考えたか？

なんか笑えてくるな、可愛いとか思っちゃったりして…

「うし、かゝえる帰る」

この場からすぐに離れたかった、直感と言うよりは本能だ、見えな
い何かに見られてる気がしたから離れたい

俺はそう思うと踵を返し、歩き始めようとしたが…

「おい待て、そこの変態やろう。」

後ろから、少々幼さの残るなんとも可愛らしい声が聞こえてきた、
か、

自信を持って言いたい気持ちがある…

可愛いな〜とか、若干考えたがそんな考えは一瞬で消した…この間
0・28秒…

「だあああれが変態じゃああ!!!」

大きな声を上げ、壮絶に振り返る俺

が、しかし

“後ろには誰も居ない” これある意味、未知との遭遇!?!とも考え
たが

宇宙人の存在は完全に信じてないから、さほど嬉しくもない。

そんなこんなでキョロキョロする俺

「おお〜い、こっちだぞお〜」

またも声が聞こえた、声の主は先ほどと同じようだ
今度は声のした方を目を凝らして、見てみる

するとさっきの人造人間（大平山・サティーヌ・悠子” 通称：悠子 命名：俺）が居た

いや、まさかとは思うが…出来れば否定されたい、確実にややくし
くなるから…

とりあえず人造人間悠子に近付いておこう、希望に似た好奇心と共に…

とりあえず観察してみる

やっぱり、このポンコ…人造人間が喋ったのか？だけでも発声昨日
は完全に無いはず…せめて録音された音声…それとも誰かg

「おい、いつまでそうしてる」

結論、マイクから声が出てます、しかもちゃんと意思もある人間
そんなことはどうでも良い、相手が話せる人間なら怖くなんてない、
だってお化けじゃないんだから！…それに恐らく子供だし。

「おいこのクソガキめ、誰が変態じゃ！」ガラの悪い不良のように
声を荒げてみる

「ひいっ！ ご、ごめス」
噛んだな、というより言葉をつつかえた拳げ句噛んだ
なかなかにおもしろい子だな…

なんか：頭に相当な激痛が：ん？

人造人間悠子が持っていた幕が折れて、いる？

普通は一定の行動しかとらないように、制御がなされてるはずなのに…

「いつつうあ…あら…パツカリ」

自分の額の少し上を触ると、2cmほど裂けていた

「あああ…あ…あ…へえ…（ガタンツ）」

マイク越しからだか、倒れた音が聞こえた

「お姉ちゃん？お姉ちゃん？」

姉？つまりさっきのは姉妹な…

「今夜の23時に東京国際展示場まで来て下さい、それじじ（バチン）」

台風は一方的に去っていった、結構大きめの傷を残し…後なんかお誘いも残し…

「一体…なんだったんだ…」

とりあえず状況を整理すると、ビックサイトに来いと…

まるで電話でデートの誘いでも受けた感じだな、だが…何故に俺なんだ！？

よく考えてみる！ 言うならば俺は通行人Aな人物：だと思っ！
若干変わっているとこもあるが：気にしちゃいけない！

そう！ つまり俺は“一般人”なのだ！

なんか意味があると考えるべきか。

俺は悩みながら帰路につく

「有明って通り道だから困るなあ……」
バスに揺られ小言をブツブツ良いながら

つづく

第卅話（後書き）

ふむふむ、今回初出発の今作を読んいただき、ありがとうございます。

現状では、もう1作と並行して連載しようと考えております。
というより、書いてはいますが、テストが近くて……

でも前と違い、たくさん書けるようになりましたよ……
相変わらず文はおかしいですが（汗）

というワケで、次回でまた会いましょう

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6445x/>

100回死んだバカと天才人造人間

2011年11月18日00時18分発行